０６／０２／２６　　礼拝メッセージ　　岡田大輔　副牧師

主　　題：幸福に降服する４
聖書箇所：マタイの福音書　５章５節

この至福の教えの中に現われる様々なことばを見て行くと、また、山上の説教に見るイエス・キリストの姿は、私たちが普段イエス・キリストに対してもっているイメージを大きく変えなければいけないのかと時々思わされます。私たちはどちらかと言うと、優しい笑顔をもって私たちに接してくださる優しい友であるイエスを思い浮かべるかもしれません。けれども、少なくとも、この山上の説教に出て来るイエスというのは、その語っている表情に笑顔はなかっただろうと思います。イエスのことばを見て行くと、私たちは時々ドキッとさせられます。それは洞察力がすごいとか、非常にすばらしい教えをしているとかではなくて、もちろんその通りなのですが、それ以上にイエスがここで語っていることが余りにも厳しいことであるから、余りにも私たちが神の基準に満ちていないその姿を見つけることがあるからかもしれません。このメッセージを聞いていたのは多くの群集でした。その中にはもちろんユダヤ人のリーダーたちもいました。彼らは決してイエスの話を快くは聞いていなかったでしょう。イエスはこのメッセージの最初から、彼らに対して非常に厳しいことばを投げかけられ続けてきたのです。注意して聞かなければいけなかったのは、当時のユダヤ人たちだけではありませんでした。今、こうしてみことばを学ぼうとしている私たちも、イエス・キリストのことばに注意をして耳を傾けなければいけません。残念ながら、２０００年のキリスト教の歴史の中にあって、私たちはある意味、神の前に正しくない世代を生み出している、そんな時期にいるのではないかと思います。この山上の説教でイエスが語られる至福の教え、幸いな人とはいったいどんな人なのか、天国に属する人がどのような特徴をもって生きなければいけないのか、そのことを見て行くとき、私たちは今ある自分たちの姿を大変吟味させられます。今日、皆さんと学んで行くみことばは、もしかすると今まで見てきた二つのことばよりも、より厳しい余り聞きたくない耳の痛いそのようなメッセージかもしれません。願わくは皆さんがメッセージの途中で席を立たれることがないように、どうぞ最後までお聞きください。

あなたには価値がある、あなたは大切です、あなたは自分をもっと愛さないといけませんと、このようなメッセージを今この世の中で私たちは非常によく聞きます。それは世の中だけではなくて、教会の中でも多く聞かれることです。多くの人たちは実際にこのように言います。これはクリスチャンの方が書いた文章ですが「神は罪人である私たちを価値のある者と見ておられます。もし、神がこのように私たちのうちに贖うべき価値というものを見い出してまで愛しておられるとするなら、私たちはそれゆえにお互いに愛し合わなければいけないし、自分自身を愛さなければいけない」とあります。自分を愛しましょう、あなたには価値があるのですよと、実際、私たちが生きているこの時代にこのメッセージは生活のあらゆるところに浸透しています。余りにもそれが浸透しているゆえに、私たちがそれと少しでも違うことを言うなら、世の中は私たちに大丈夫ですか、どこかおかしくないですか、もしかするとあなたはどこか他の星からやってきたのではないですかというような対応をされることがあります。便利になったもので、今はインターネットを使ってこのような「自己愛、自己価値」ということばを入れて検索すると、非常にたくさんのホームページが出て来ます。今週前半はそれらを読んでみました。どこもかしこも基本的に同じメッセージをしています。あなたが問題を乗り越えて、あなたが幸福になって、あなたが人生の歩みを見い出して生きて行くためには、自分を受け入れ自分の価値を認め自分を愛することが必要ですと。そのように数千、数万、いやもっと多くの人たちはインターネットを通して、雑誌を通して、本を通して、テレビ番組を通して、いろいろなメディア媒体を使って、私たちに訴えかけるのです。愛しましょう！私たちは自分自身をと。クリスチャンの著者たちも例外ではありません。私たちがこのように自分自身のうちに価値を見い出し、自分自身を愛するようになってこそ、私たちは初めて神を愛することができるし、他の人たちを愛することができるようになるのですと。時間があればこのことをもっと詳しく話したいのですが、以前、私が学びまた聞いたことがある話しをお聞きください。律法の中で最も大切な二つの命令は神を愛することと隣人を愛することですが、このような考え方をする人たちは三つ目の命令を加えるのです。これら二つの命令ができるようになるために「自分を愛すること」と、なぜなら、イエスは言われる、あなたがたは自分を愛するように隣人を愛しなさいと、だから、自分を愛することができなかったなら、他の人を愛することはできません、神はあなたのうちに価値を見い出してあなたを救ってくださった、だから、あなたが本当に神に喜ばれるように生きて行くためにはまず、あなた自身を愛することが必要ですと言うのです。そうするべきでしょうか？そのように聖書は私たちに教えているでしょうか？私たちが本当に他の人たちを愛し、神を愛し、本当に幸せな者

としてこの地上での生活、また、永遠を過ごすために、私たちはまず今の自分を愛することが必要なのでしょうか？私たちがこの至福の教えを見て、イエスが幸いな人がどのような人かという質問に答えて行く姿を見るとき、私たちはそのような考え方を見い出すことができない現実に気付きます。確かに、イエスはここで自分自身のうちに価値を見い出す人は幸いだとは言いません。また、自分を愛する人は幸いですとも言いません。むしろ、言われていることの内容をよく考えて見ると、その正反対を私たちに教えているのです。

今まで二つのことを見てきました。３節と４節、幸いな人は心の貧しさという特徴をもっている、それは自分は霊的に何一つ自分を良くさせるものはもっていない、霊的に私は全くの貧困の中にあって、完全に破産した状態にあって、自分を助けることなど何一つできない者である、そのことをよく分かっている人でした。その人は自分のうちに価値を見い出すでしょうか？それだけではありません。２番目は悲しむ者、嘆く者が幸いでした。そのような貧困を私たちにもたらした私たちの罪のゆえに悲しみ、嘆くのです。私たちは確かに今救われているけれど、今も神の基準を犯している、罪の中を歩む者なのです。誰一人として私は基準を満たして生きていますと言うことはできないのです。そのような自分を愛することができますか？そんな罪に汚れている自分を。イエスが天国に属することができる天国民の肖像画を描くときに、それは現代の教会が私たちの前で描いているものとは少し違うのかもしれません。この二つだけでは終わらないのです。今日は３番目の幸福な者の姿を見て行きます。いつもと同じように、なぜこの人が幸福と言えるのかということと、幸福な人がどのような特徴をもっているのかということを見て行きます。後の方を先に見て行きます。

☆天国に属する人の特徴

３．柔和である　　５：５

私たちがこのことを考えて行くとき、私たちは自分自身をよく吟味しなければいけません。私は本当に天国に属する者としてこのような特徴を現在進行形でもっているかどうかと。天国に属する人は持っているのです。その現われがもしかすると薄いかもしれません。でもそうなら、私たちはそれらを大いに発揮しながら生きて行かねばなりません。イエスのみことばを見て行きましょう。**「柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。」**

（１）どのような人が柔和な人なのか

〇<u>霊的な柔和さをもっている</u>＝私たちがイエスの教えを正しく理解するために必要なことは、「柔和」ということばがどのような意味をもっているのかをしっかり理解することです。残念ながら、私たちはこの「柔和」ということばを日常的に使うことはほとんどありません。ですから、このことばがどんな意味をもっているのか、イエスはどんな意味でこのことばを使ったのかを正しく理解しなければ、「柔和さ」がなぜ真の天国民の特徴なのかを理解することもできないでしょう。「柔和」ということばを辞書で見ると「優しく、穏やかな、とげとげしいところのない物柔らかな態度・様子」で、この訳は非常に良い訳だと思います。原文が言わんとしている真意をよく捉えています。ここで使われているギリシャ語のことばは、優しさを表わすだけでなく柔らかさも表わす、そのような意味を持ちます。これは人間の特徴を表わすために使われるだけでなく、たとえば、優しく吹く風、また、病気のときに私たちを健やかにする薬、それを表わすためにも使われました。また、野生の動物、特に馬などを人が乗れるように飼いならす、野生の特徴を抑えてそれが出てこないようになった状態を表わしてこのことばが使われました。これはまさに天の御国の王であるイエスがもっておられる特徴でもありました。マタイ２１章を見ると、イエスがろばの子に乗ってエルサレムに入場して行くその姿を説明するときに、イザヤの預言を取ってこんなことばを語っています。２１：５**「シオンの娘に伝えなさい。『見よ。あなたの王が、あなたのところにお見えになる。柔和で、ろばの背に乗って、それも、荷物を運ぶろばの子に乗って。』」**と、イエスは柔和な方だったのです。マタイはこのようにイザヤ書を引用して説明しただけではありませんでした。実は、イエスご自身が「わたしは柔和である」と言っておられます。皆さんもよくご存じの箇所です。１１：２８－２９**「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。:29 わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。」**、**「心優しく」**ということばはこの至福の教えの中で「柔和」と訳されているのと同じことばです。イエスは柔和だったのです。優しくやわらかだったのです。けれども、私たちがここで気付くべきことは、イエスが単に優しくやわらかな態度を持って人に接することを言いたかったのではないということです。私たちの周りにはたくさんの優しい人はいます、クリスチャンでなくても。でも、イエスが言われる「幸い」はそうではありません。これは霊的なことに関わっているのです。ある注解者は犬のことを引き合いに出しました。犬の中には人懐っこい優しい犬もいれば、すぐに噛み付きたがる凶暴な犬もいます。それはもって生まれた性質なのです。同じように、人間ももともと優しい態度をすることが得意な人もいればそうでない人もいます。ここでイエ

スが言っている「優しさ」はそれではないのです。
　では、どのような優しさでしょう？そのことを私たちがしっかり見なければここで言われている意味が分からないのです。そのことを考えるために一つの旧約聖書の箇所を見なければいけません。なぜなら、至福の教えはイエスのオリジナルではありません。旧約聖書の教えを用いてイエスがこの当時のユダヤ人たちに「こういうことです」と説明しているのです。ですから、ここには基になる旧約聖書の部分があるのです。それは詩篇３７篇です。３７：１－１１**「悪を行なう者に対して腹を立てるな。不正を行なう者に対してねたみを起こすな。:2 彼らは草のようにたちまちしおれ、青草のように枯れるのだ。:3 主に信頼して善を行なえ。地に住み、誠実を養え。:4 主をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。:5 あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。:6 主は、あなたの義を光のように、あなたのさばきを真昼のように輝かされる。:7 主の前に静まり、耐え忍んで主を待て。おのれの道の栄える者に対して、悪意を遂げようとする人に対して、腹を立てるな。:8 怒ることをやめ、憤りを捨てよ。腹を立てるな。それはただ悪への道だ。:9 悪を行なう者は断ち切られる。しかし主を待ち望む者、彼らは地を受け継ごう。:10 ただしばらくの間だけで、悪者はいなくなる。あなたが彼の居所を調べても、彼はそこにはいないだろう。:11 しかし、貧しい人は地を受け継ごう。また、豊かな繁栄をおのれの喜びとしよう。」**、この１１節のことばをイエスは完全に引用しています。**「しかし、貧しい人は地を受け継ごう。」**、ここには**「貧しい人」**とありますが、このヘブル語のことばは「柔和」と訳すべきことばです。なぜ「貧しい」と訳されているのでしょう？実はこの二つのことば、「貧しい」と「柔和」は語源が同じなのです。そして、二つは非常に近いことを教えます。けれども、強調している部分が違うのです。このことは「柔和な者が幸いである」ことを理解するために大切な点です。マタイ５：５を見ると「柔和な…」というところに印が付いています。それは欄外に注釈があるということです。そこを見ると「あるいは、へりくだった者」とあります。この「柔和な」と訳すことばは「へりくだった者」ということもできるということです。思い出してください。「心の貧しい者」というのは実は「へりくだった者」でした。自分のうちに霊的に何もすばらしいものがない、全くの貧困の中にあると分かっているから、その人はへりくだって「助けてください、あわれんでください」と言います。このように同じことばから派生している二つのことば、これはギリシャ語でもありますし、ヘブル語ではもっとあります。では、この二つのことばをどのように理解するべきでしょう？意味の違いはどこにあるのでしょう？
　「貧しい」と本来訳されることばは、私たちの状況の悪さをしっかり理解しているゆえに、必要であるということを認識していることです。社会的に経済的に霊的に私の置かれている状況が余りにも悲惨であるがゆえに、私には必要がありますと考えるのが「貧しい」ということばが強調していることです。例を挙げるなら、マタイ５：３のところでも話しましたが、ルカの福音書１６章に金持ちとラザロの話が出て来ます。ある金持ちのところに貧しい病気のラザロという人がいました。その人は自分で何もすることができなかったので、物乞いをしながら金持ちの家から出て来るもので生活をしていました。彼は貧しかった、自分のうちには自分の生計を立てるものが何もなかったのです。このラザロの状況がヘブル語の「貧しい」ということばが強調していることです。５：３の「心の貧しい…」もこの意味です。では、詩篇３７：１１で本来「柔和」と訳されることばは何を意味、強調しているのでしょう？それはたとえて言えば、ヨブ記の最後４０章のヨブです。ヨブはすばらしい人物でしたが神によって試練が与えられました。その試練を最初はよく凌いでいた、感謝をもって仕えていたのですが、それが続くにつれて彼は苦しみの中で自己憐憫に陥って行きました。その中でヨブは「神さま、どうしてですか？なぜですか？」と問い続けました。私は正しいのにあなたはなぜこんな苦しみを私に与えるのですかと。神はヨブにその試練の理由をいっさい説明しませんでした。ヨブはなぜこんな苦しみに会ったのか知らないままに４０章を迎えてヨブ記は終わるのです。では、なぜヨブはへりくだって神の前に悔い改めるのでしょう？その理由は、神がわたしはだれであるのかということを圧倒的な形でヨブに示すからです。神はどのようなことを問われたのでしょう？あなたはわたしが世界を創造したときにそこにいましたか？というのです。ヨブは「いや、いませんでした」としか言えません。あなたはわたしがどんな計画をもってすべてのものを支配しているか分かっていますか？と問われて「いや、私は分かりません」としか答えることができませんでした。ヨブが出会うのは圧倒的な形で偉大さを示された神です。その偉大な神の前に立ったヨブが唯一できたことは、へりくだって主の前に悔い改めることだったのです。それがここで「柔和」と訳されるべきことばがもっている意味、強調なのです。それが根底にあるのです。両方とも「へりくだり」を表わしており、「へりくだり」にはこの両方の部分があります。自分の貧しさを知っているがゆえに、私には誇るところがありませんといってへりくだる、もうひとつは、神のすばらしさをありのままに知ったがゆえに、私はへりくだることしかできませんというものです。強調点が違います。一方は自分の周りの状況に目を向け、もう一方は神のすばらしさに目を向けているのです。ここでイエスが引用されていることばは、まさにこの「へりくだり」なのです。神を見上げたときに、

何と私は不価値な者であるのか、何と私はふさわしくない者であるのか、そのことに気付いたときに起こってくるへりくだり、柔和なのです。イエスが**「柔和な者は幸いです」**と言われたとき私たちはそれを思い浮かべないといけないのです。私たちは自分を神の御座の前に置かなければいけないのです。そこで私たちが唯一言えることは、イザヤが言ったこと、もう私はだめだ、こんなきよい神の前に立った私はもう滅びなければいけないということです。これがへりくだり、謙遜です。これがイエスが言われること、これが「柔和」、優しさということの根底にあるへりくだりの態度なのです。

〇<u>柔和な人とは</u>？＝私たちは最初に５：３で**「心の貧しい者は幸い」**であることを学びました。私は完全な貧困の中にいる、霊的に破産した者であると分かっている人、その人は同時に、その破産の状態、貧困をもたらした原因が罪であることを知っています。それゆえに、その罪を悲しんだのです。そして、その悲しみは私たちに霊的な柔和さをもたらします。私たちはロイド・ジョーンズ博士が言ったことに心から同意することができます。彼は「柔和さというのは根本的に自分自身に対する正しい見解である」と言います。一体何が正しい見解なのでしょう？自分を正しく見つめたとき、どのような姿が見えてくるのでしょう？今まで見てきたことから私たちが確かに言えることは、この世が言うような私には価値があります、私は愛されるべき者です、という姿ではありません。なぜなら、私は罪人であり完全に汚れ果てていて私には何一つ良いところはないと分かっているからです。自分自身の罪の汚れというのをそれが完全に自分たちの生涯のすべてを侵していることを知っているなら、私たちは自分を愛することなどできなくて、むしろ、蔑むことしかできないはずです。神の前にある罪深さ、神の完全なきよさを理解したときにもつ自分自身の罪深さを覚えるなら、自分の無価値さを知ることしかできません。私たちがこの真実を理解したときに私たちが何よりも確かに知ることは、私が神から受けるにふさわしいことは地獄における永遠のさばきだけであるということです。私たちが忘れてはならないことは、神が私たちを救ってくれたのは私たちが愛されるべき存在だったからではありません。私たちに何か霊的な価値があったからでもありません。神が私たちを救ってくださったのは、神が恵み深く、神があわれみ深かったからです。だから、全く価値のない地獄に行って当然のさばきを受けるのが一番ふさわしい者を神は救ってくださったのです。パウロは言います。私たちがまだ罪人であったときに神はこの愛を示してくださった、私たちが御怒りを受けるべき子らであったときに神は怒りではなく愛を与えてくださった、神の子としてくださったと。どちらも私たちが神の前に価値のある愛されるにふさわしい者であったことを教えません。このような見識をもつなら、当然起こってくる結論というのは、なぜあなたは私にさばきを与えないのですか？どうしてあなたは今日も私に呼吸を与え心臓の鼓動を与え着る服を与え住む家を与えともに交わることができる兄弟姉妹を与え愛する家族を与え、私の必要を満たしてくださり、私にあなたの栄光のために生きるいのちを備えてくださっているのですかということです。これは驚くべきことです。「驚くばかりの…」アメイジング・グレイスという賛美があります。こんなに罪深い私たちにさばきでなく救いを与えてくださるとは何という驚きなのでしょう。そして、この驚きは神に対する驚きだけではありません。それは私たちの周りの人たちに対する驚きでもあります。永遠のさばきを受けるにふさわしい者を周りの人たちは優しく接してくれる、これも驚きです。

　そのことをしっかり理解しているなら柔和な人というのは特定の生き方をして行きます。（ａ）<u>プライドがない</u>＝私には価値がないと思うならプライドはもてません。神の前に私は誇るところが何一つないのに、どのようにプライドをもつのでしょう？柔和な人は自分自身のうちに何か誇るところを見付けることができません。私はこんなにすばらしいのですよ、と言うことも思うこともそれを態度で現わすこともできないのです。その人はよく分かっているのです。神の助けがなければ私は何一つできないということを。今していることのすべては神の恵みなしにはできないことを分かっているゆえに、私たちは誇ることなどできないのです。同時に、その人はよく分かっています。神が願うなら私よりもすぐれた人を神は起こして、私が今やっているすべてのことをより良くさせることができることを。柔和な人は謙遜であり、心に高ぶりをもっていないから、横柄な態度で人に接することはないのです。（ｂ）自分自身の権利を主張しない＝またこの人は自分に与えられている権利を主張しません。自分の立場、特権、所有物など、それらを本当は受ける価値がないことを知っているのです。柔和な人はそのような権利を主張する代わりに、キリストと同じような「へりくだり」という特徴を現わします。ピリピ書２章でパウロは私たちに非常に大切なことを教えました。そこでは「へりくだり」がどのようなものか。その模範が示されたのです。２：６**「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、」**と、神のあり方をもっているその権利をイエスは主張しようとはなさらず、７節**「 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。」**、十字架の死に至るまで従順でした。それは、イエスが「わたしは柔和だ」と言われたからです。マタイの福音書５：３８からイエスが話されているその中でイエスが私たちに教えていることは、あなたの権利を相手のために譲りなさいということです。**「『目には目で、歯には歯で。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。：39 し**

かし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。:40 あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着もやりなさい。:41 あなたに一ミリオン行けと強いるような者とは、いっしょに二ミリオン行きなさい。:42 求める者には与え、借りようとする者は断わらないようにしなさい。:43 『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。:44 しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。:45 それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。:46 自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。取税人でも、同じことをしているではありませんか。:47 また、自分の兄弟にだけあいさつしたからといって、どれだけまさったことをしたのでしょう。異邦人でも同じことをするではありませんか。:48 だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。」、これらはみな一貫してそのことを教えています。あなたが報復するのではなく、その報復の権利を廃棄して他の人のために仕えて行きなさいと。それゆえに、ある神学者はこの部分をこのように説明しています。「柔和さというのは、他の人の最善が自分の最善よりも先に起こるように考え実践するコントロールされた感情である」と。だから、柔和な人は優しいのです、柔らかいのです、復讐しようとしません、怒りを自分のものにしようとしません。なぜなら、この人は神のさばきに信頼を置いているからです。確かに、私たちは人生の様々なときに不当に扱われます。悔しい、苦しい、いやだという思いをします。ある人たちはそれゆえに自己憐憫に陥り、ある人たちは復讐心を燃やします、怒りを心の中に蓄えて行きます。しかし、柔和な人はそれをしないのです。相手に対する思いを優先させるからです。神に信頼し神の復讐に任せているから、今私はへりくだって仕えて行こうとするのです。

柔和であることは怒りをもたないことではありません。イエスは怒りました。神殿を２回きよめられました。ヨハネ２章にそのことが記されていますが、そのときのイエスの姿は怒りに満ちていたはずです。それは神の御名が汚されたからです。しかし、イエスの方に攻撃の矢が向けられたとき、イエスは天使の軍勢を呼んだでしょうか？天から火の嵐が降ってくることを命じたでしょうか？そうはしませんでした。死に至るまで、十字架の死まで主は従順だったのです。皆さんは柔和でしょうか？人からの攻撃を受けたときどのような思いでその人に接するでしょうか？柔和な人は神に信頼するゆえに神に任せることができるから、相手に対しても優しく接することができるのです。これらは詩篇３７篇に記されていることです。特に１－１１節のところを読んでいただくと、いかにこの著者がこのような怒りをもつことが正しくないことであるのかを教えているのが分かります。８節からこのように記されています。**「怒ることをやめ、憤りを捨てよ。腹を立てるな。それはただ悪への道だ。:9 悪を行なう者は断ち切られる。しかし主を待ち望む者、彼らは地を受け継ごう。:10 ただしばらくの間だけで、悪者はいなくなる。あなたが彼の居所を調べても、彼はそこにはいないだろう。:11 しかし、貧しい人は地を受け継ごう。」**。私たちはキリストによって贖われたのです。私たちは天の御国に入れられたのです。私たちは天国の国籍を今もっているのです。私たちはこの柔和さをもって生きるのです。

（２）なぜ柔和な人が幸いなのか

「…その人は地を相続するからです。」とあります。ここで言われている「地」というのは、神がアブラハムに約束された地を指しています。文脈を見て行くときそのことが分かります。イスラエルの民はこの約束の地を今まで一度も自分のものとしたことがありません。イエスが話されていたこの当時、イスラエルはローマの支配のもとにありました。その前はギリシャの支配のもと、その前はペルシャの支配、その前はバビロンの支配、その前、北の王国はアッシリヤに支配されていました。南北に王国が分かれていた時代も確かにイスラエルの民はその地にいましたが、約束の地すべてを得ていたわけではありません。もっとも繁栄をもたらしたソロモンの王政の時代でも、彼らの支配地はアブラハムに神が約束された部分とははるかに違いました。確かに、ヨシュアによって民はこのカナンの地に入り征圧しそこに住み始めましたが、彼らは約束されたすべての地を占領することはしませんでした。その前、民はエジプトにいました。約束を受けたアブラハムはこの約束の地を寄留者として歩いたと書かれています。ヘブル１１：１３**「これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。」**と、彼は天幕に住んだのです。彼がこの約束の地で得ていた土地は、彼の妻を葬った洞窟だけです。約束はあるけれど誰も手にしていないところ、イエスはそれを「あなたの相続財産」だと言われるのです。あなたにはもう土地が割り当てられているのです。天国にあるのです。私たちは間違いなくそこに入るのです。その約束、その確信、その希望があるから、私たちは幸いなのです。たとえ、すべての人たちが私たちの生活からあらゆるものを奪い取ったとしても、天国に属する人は柔和なのです。なぜなら、この人にはこの地上のことが問題ではなく、アブラハムと同じようにたとえこの地上で財産を得ることがなくても、神がいつか与えてくださる神が立てられた都に希望を置いているからです。それが柔和な人、幸いな人です。

どうでしょう？私たちは自分自身のうちに価値を見い出さずに幸せになれるでしょうか？自分自身を愛することなく幸せになれるでしょうか？イエスのことばを見ていると、正直私は自分を愛さないほうが幸せになれると思います。イエスのことばを見てそれを知って自分の心を吟味したときに、私は自分自身を愛することはできないと思います。汚れているから罪を犯すから、圧倒的に足りないものだから、私はこの学びを終えて確かに思ったことは主の前にへりくだって神さま赦してくださいということでした。どうしてこんな私を救うのですか？どうしてこの私にこんな祝福を与えてくださるのですか？と、そこには驚きしかありません。もし、私たちが自分自身の姿を神が見ておられるように見るなら、私たちはきっとこんな思いをもつでしょう。そして、そのような思いをもつなら、そこに現われてくるのは本当の霊的な優しさです。願わくは、私たち一人ひとりがそれを完全に発揮して、お互いの中で常に優しくやわらかく、お互いを愛し合いながら接することができるようになって行きたいと思います。